

セブ島 第8・9・10回目の『僕の村』

ISP: (International SCUBA Peasant)

国際 鈍(ドン)百姓 ダイバー

伊原 昭男

こんにちは、

日本を離れたのは2010年10月半ばの小春日和、それから2ヶ月ぶり、年の瀬にセブ島『僕の村』から帰国した。今回でちょうど10回目の長期訪問である。現地では連日30度の下で、Tシャツと半パンだけで2ヶ月間を過ごしてきた。成田に戻った時のあの寒さはいったい何なのか、イヤ、震え上がってしまった。

帰宅してからは、大掃除だの窓拭きだのと容赦ない注文に、「しおらしく」こまめに働き、自治会への2ヶ月間の不義理を挽回し、スイスから1年ぶりに帰国した長男に合わせて家族旅行に出かけたりしているうちに、あつという間に正月が過ぎてしまった。文明国では、時間が矢のように過ぎて行く。今は、もう次(第11回目)の旅支度をしている。今年の春の花粉症は例年になく激しいらしい。今度は2月25日に日本を脱出し、4月10日まで、去年と同じく1ヶ月半を『僕の村』で過ごそうと、にんまりしながら作戦を練っている。

さて、しばらく、『僕の村』の備忘録を記して来なかった。第7回目までの備忘録には、『僕の村』の海、そこに住む生物(亀など)、ショップ仲間、フレンドリーな村人、身体障害者のダイビング、・・・などについて、いろいろ紹介してきた。今回はその後の3回の滞在についてトピックスを元に現地の「文化」などを紹介しよう。

過去3回の滞在を紹介するに当り、時期的な言葉を以下の通り略すこととする。

第8回目の、2009年 秋の2ヶ月間を「前々回」、

第9回目の、2010年 春の1ヵ月半を「前回」、そして直近の

第10回目の、2010年 秋の2ヶ月間を「今回」、と表現する。

[クリスマス・コンサート]

話の発端は、遡ること2年前の第7回目の訪問である。

初めて『僕の村』を訪ねる妹が現地の子供たちに音楽を教えたいと発案した。そこで、私のダイブマスターの先生 Dino に相談したところ、彼は当時地元小学校のPTA 役員をしていて、校長先生に面会するアポを取ってくれた。早速、リコーダー(縦笛)6本、メロディアン(ヤマハでは「ピアノカ」と呼ぶキーボード)3台を手に抱えながら、妹と地元小学校に校長先生を訪ねた。そのことがそもその始まりである。

我々の小学校訪問に併せて、『僕の村』のパプレオ校長先生は素晴らしい企画をして我々を迎えてくれた。子供たちに行進用のコスチュームを着させ、全員で我々を待ち受けくれたのである。我々が着くと子供たちは学校の数少ない楽器でフィリピン国歌を演奏しながら、マーチを披露してくれたのである。たった我々二人のために。(この時の話は、第7回目の備忘録に写真入りで載せたのでそちらをご覧ください。)

この歓待に感動した我々は校長先生との話で、「この地でコンサートが開催できますか」と申し出たところ、二つ返事で話がまとまった。そこで時期はその年の暮れクリスマス前、場所はパプレオ校長先生のこの地元小学校と決めた。その後、小学校を公式的に利用する許可を得るため、パプレオ校長先生と連名で、市の教育委員長に嘆願書を出した結果、教育委員会も「市の公式行事」として協力してくれることになった。

(公式行事になったことで、市は財政難であるにも関わらず、コンサート終了後にレッチョン・ババイ(豚の丸焼き)とソフトドリンクを囲んで、関係者と談笑する「感謝パーティ」を開催して下さることになった。) ……

そして、前々回、12月9日、(今思えば、母が危篤になる直前であったが、)妹の他、6名ものピアノの先生方がこのコンサートのために『僕の村』を訪問して下さり、(市にはピアノがないので、)「ミュージックベル」を主体としたクリスマス・コンサートを開催した。

コンサートには、当初小雨にも関わらず、聴衆は1,000人を越えた。

出席を予定していた市長は出張が入り参加できなかったが、副市長、教育委員長、他の(公立・私立)小学校やハイスクールの校長先生方の他、PTA役員、一般市民など大勢が参加した。もちろん、半数以上は小学生たちである。私は、日本側の催しの司会を担当させてもらった。

クリスマスらしい、澄み切ったミュージックベルの音色は『僕の村』の人たちにとっては初めて聞くもので、パプレオ校長先生から、「余りにも素晴らしいコンサートで、感動して涙が出た。」とお言葉をいただいた。

世界共通のクリスマス・ソングや日本民謡などを演奏した。フィリピンの公式行事に欠かせないフィリピン国歌の演奏には、既に何度も来てくれている千葉高の友達 MASA もフルートで合わせてくれた。

また、小学生達の発表もあり、セブ島の民族衣装を身につけてダンスを披露してくれたり、ソロやグループで民謡やポップスを歌ってくれたり、フィリピン／日本の音楽文化の交流会のようなイベントに盛り上がった。特に、我々が一番最初に訪問した時に寄付した、わずかな楽器を使って子供が演奏するのを聞いた時には、正に感無量であった。今回寄付をするもって大量の楽器を使って、さらに大勢の子供が音色豊かなマーチをバックに行進する様子が想像できて、つい目頭が熱くなった。

コンサートに続いて行った「寄贈式」も盛況であった。ディズニー・キャラクター付きの新品の鉛筆2,000本、日本の小学生が使った中古楽器「ピアノカ(キーボード)」25台、「リコーダー(縦笛)」25本、子供用古着30kg以上、ノート・ボールペン・消しゴムなどなど大量の文房具、商店名入りのタオル・手ぬぐいなど、それはそれは大量の品物を寄附した。ほとんどが妹たちピアノ先生方が手分けして持ち運んでくれた品物である。

妹達は子供達(約750人)と直接触れ合いたいというので一人一人と握手をしながら、ディズニーの鉛筆を一人2本ずつ会場で配ったが、それでも500本ほどが余り、残りは学校行事に景品として使っていただくことにした。また、寄附した大量の楽器は、他の学校の生徒も交え「音楽クラブ」を作ること考えているとのことであった。(地元小学校には、「ライヤー」という手持ちの鉄琴が数台と、その他は「ドラム」しかない。)

帰国後、ある友達曰く、「在外公邸で遊んでいるどっかの大使館員より、よほど『国際親善』に尽くしているじゃないか!」と言ってくれたのは嬉しかった。結果的に国際親善・文化交流になったことがなによりだ。

妹たちは、コンサートを終えるや、トンボ帰りに帰国した。その2日後、母が危篤になり、私も予定を変更して急遽帰国した。

[教育委員会からの表彰]

今回、妹が3度目に来る機会を捉え、日本から二人で手分けして持ってきたリコーダーとピアノカを三度寄付しようとしてパプレオ校長先生を訪ねた。パプレオ校長は我々二人のために、再び「子供たちのミニ音楽会」を披露して下さった。もちろん、子供たちが演奏する楽器は、前々回我々が大量に寄付したピアノカとリコーダーである。今回は大勢の子供たちが楽器を手にグループ演奏してくれた。ソロの演奏もある。中には日本の童謡「ぞうさん」までも披露してくれた。

フィリピンの『僕の村』の小学校には、専門の音楽指導教師がいない。今回のコンサートは、上手な子供が他の子供に教えながら自主的に練習をしたのだと言う。子供たちの演奏会に引き続き、今度は先生たち全員がステージに上がり、我々二人に「Thank you」を歌ってくれた。

さらに驚いたのは、最後に、妹と私がステージに呼ばれた時のことである。促されるままに私は簡単な挨拶をした。すると、驚いたことに、学校から『表彰』を受けたのである。フィリピン政府およびフィリピン文部省の二つの公式ロゴが印刷された表彰状を受賞したのである。賞状の下には、教育委員長、パブリオ校長先生、PTA 会長のサインがなされている。

ミニコンサートのあと、教室の一つに案内され、ハンバーグのような軽食とソフトドリンクで先生方と歓談した。小さな手作りの昼食会であったが、高級ホテルのパーティに招かれるより嬉しかった。

[韓国人のダイビング事故]

ダイビングは「安全」なスポーツである。また、水中では「重力」がなくなるため、地表では逃れることができない「体重」から開放される。だから、腰痛持ちの人でも、下半身麻痺の身体障害者の人でも、さらには息切れを起こす超・肥満の人でも、「体重のない世界」を心から楽しむことができる、「優しい」スポーツである。しかも見たこともない未知の世界、壮大で厳しい大自然の営みを、目前に覗き見ることができるのである。なんという贅沢で優雅なスポーツであることか。

しかし、まかり間違えれば命取りになるスポーツでもある。でも決して「危険」な「怖い」スポーツではない。なぜなら、事前に理論を学び筆記試験を受けて規定の「知識」を身に付け、さらに実地訓練を受け「実技」試験をパスして『ライセンス』を取得しなければ始めることができないからである。

(注意: 『ライセンス』がなければできないスポーツだけに、幸いなことに、客質・客層がある程度絞られている。換言すれば、ダイバーには紳士・淑女が多いのも事実である。)

ところが、・・・、前々回、『僕の村』で大きなダイビング事故が起きた。韓国人ショップでの事故である。このショップは曰く因縁つきの店で、海亀の背中にまたがった写真(もちろん「禁止行為」)を堂々とショップの入り口に掲載しているような無神経なショップである。ルール破りの常習犯、不届きものの確信犯ショップで、我々周りのショップから常にひんしゆくを買っている店である。自然と、お客様も似たり寄ったりでマナーの悪い韓国人ダイバーが多い。(残念なことに、日本人も評判はよろしくない。「一見さん」が多いためか?) その韓国人ショップがとうとう大きな事故を起こした。「いつかやるだろう」と誰もが思っていた矢先である。

あまり書くと「ダイビングが危険」と思われてしまうのが、私としては不本意なのだが、滅茶苦茶をすることもあることも事実なので正直に記す。

前々回の『僕の村』の記録を見ると、11月24日とある。この日は『僕の村』では珍しく3日程雨が続いたあとで、気温が28度と、肌寒い日だった。『僕の村』では、日中28度というのは肌寒く感じる。特に、水温29度の水の中に50分も居た後はなおさらである。ダイブマスターは水中で無駄な動きをしないため余計なエネルギーを発熱しないので、身体が冷え切ってしまうのである。(初心者ダイバーは常に動いているので、この寒さを感じない、その分エアの消費も多くなる。)

午前のダイブを終えてお客様と戻ってくると、その韓国ショップの前に救急車が止まっていたので、仲間に聞くと「事故」を起こしたらしいとのことだった。また、救助活動を指導するために、私の尊敬する「Abe」が呼ばれ、現地で指揮を執っているという。Abeは『僕の村』では最高位のライセンスを持った英国人で、「海亀」の生態を教えてくれた私の先生でもある。(Abeと海亀については、第6回目の備忘録を見ていただきたい。)

昼食を取り戻って来ると事故の「あらまし」がかなり分かった。韓国人のテクニカル・ダイバー(40m以上の深海に潜る特殊なライセンスを持ったダイバー)3人が「減圧症」(所謂、「潜水病」)事故を起こしたらしい。お客さま1名とインストラクターとダイブマスターの計3名である。お客さまは死亡、ダイブマスターは病院のチェインバー(高圧の加圧室)の中、インストラクターはまだ水の中に居るとのことであった。もちろん、3人とも全員、テクニカル・ダイバーの資格を持っている。

午後のダイブを終え、ショップに戻るとさらに詳細が分かった。3人は、なんとなんと、水深『131mま』で行き、そこに『25分間』留まっていたことが、彼らの腕にはめた「ダイブ・コンピューター」の記録に残っていたというのである。なんと「自殺行為」だ！！

人間、フリーダイブ(素もぐり)では、どんなに深く潜っても「減圧症」を起こすことはない。フリーダイブの世界選手権では、様々な潜り方があるが、ある種目の記録は現在水深160mを超えている。千葉県勝浦の海女さんが「あわび」を獲るのに素もぐりで何度も水深20m、30mまで行っても全く減圧症にはならない。問題は、水の中で『呼吸する』ことにある。詳しい説明は省略するが、水の中で呼吸をすることによって地表では悪さをしない窒素、空気中に80%も含まれるこの窒素が「悪さ」をして「減圧症」を引き起こすのである。減圧症にならないためには、深く潜った時は「ゆっくり」浮上しなければならない。この「上がり方」が非常に大事で、ダイブマスターがお客さまを案内して水面まで引き上げるのに一番注意を払うポイントでもある。水深40mに4・5分間居ただけでも、水面に上がるまでには最低でも2・30分はかけなくてはならない。

そこで問題！

水深100mに20分間居たら、安全に水面まで浮上するのに、どのくらい時間がかかるか？

1時間？ ノー、ノー、答えは9～10時間である。

そうなのだ、浮上するのに必要な時間の計算は、大変複雑で、潜った深さやそこに留まった時間に比例するような単純計算ではない。

(注意: この複雑な計算を今では腕時計のような「ダイブ・コンピューター」が瞬時にやってくれる。昔は潜る前に、毎回減圧表を使って潜水計画を立てたものである。したがってコンピューターは今では必需品である。『僕の村』では初心者を含むほとんどの人がコンピュータを持っている。日本人はすぐに水中カメラを買いたがるが、私はカメラを買う前にまず命を守るコンピューターを買うことを「強く」指導している。)

今回、結局インストラクターの一人だけが無事に帰還した。しかし、彼が(ダイブ・コンピューターの指示に従って)水面に上がったのは、事故を起こしてから『18時間』後である。わたくしなんぞは、暖かいとは言え、水温29度の水の中に90分間も居たことがあるが、身体はもう、ガタガタ、ブルブル震え、アゴはガクガク鳴り、あの寒さは二度と経験したくない。しかもその日は、今回と同じ気温28度という肌寒い日であった。水は熱伝導率が非常に高いので、水温29度でも体温がドンドン奪われる。(100度のサウナに入ってもガマンできるが、100度のお湯に浸かったらたちまち火傷する理屈である。) 無事に帰還したインストラクターは水深131mに25分間も留まったので、ダイブ・コンピューターが水面まで安全に案内(指示)するのに18時間もかけたのだ。その間、彼は水の中で、「低温症」と戦いながら震えていたことになる。

この日の午後3時、仲間の Eusel がお客さんを案内しながら韓国ショップの前の水の中を通過した時には、そのインストラクターは既に水深25mまで来ていて、仲間たちが次々に空気ポンペを海中に運んでいたという。ということは、事故を起こしたのが午前11時で、水深25mまで来たのが午後3時だから4時間後である。そして最終的に水面に浮上したのが翌朝の5時だから、そこから水面まで、さらに14時間後ということになる。水面まで合計18時間かかった訳であるが、4時間後には水深131mから25mまで来ている。25mと言うと水面が「すぐそこ」に見える深さで、すぐにでも浮上できそうなものであるが、それから14時間も冷たい、というより「寒い」水の中で、震えながら耐えていた訳だ。これも驚きである。

さて、このインストラクターは18時間を水の中で耐え抜いて生還したが、もう一人のダイブマスターは、パニックを起こして浮上しようとしたお客様を追いかけ、「減圧症」でチェインバーに入った。一命は取り留めたものの、脳細胞の一部がダメージを受け、結局、首から下がパラライズ(麻痺)してしまった。お客様の方は何かの原因でパニックを起こして急浮上し、前述の通り、死亡するという、凄惨な事故であった。

亡くなったお客さん自身、テクニカル・ダイバーの資格を持っていたのに、なぜ急浮上をしたのか。彼らは背中に2本のタンクを背負い、両腕の脇下にそれぞれ1本ずつを抱えて、合計4本のタンクを持って潜るのである。そもそも、私なんぞ、水深131mの世界に行っても何がおもしろいのか、と思ってしまう。真つ暗な

中で自分自身の記録を作るのが目的なのか？ Abeは103mまで潜ったことがあると言っている。しかし、この深さに到達するために、その前日は102mまで潜り、さらに前々日には101mと、3日間かけてこの103mの世界まで到達したのだという。彼が言うには、この1m、1mが「非常に大きなバリア」で、「安全な帰還」を常に計算しながら、毎日、この「1m、1m」をどう乗り越えるかが大問題であった、と言っている。因みに、この韓国人3人は、事故の前日に115mまで潜っていたことも判明した。大ベテランのAbeに比べ、まさに、「無謀」、「無神経」、「無知」の事故であった。

ダイビングの事故件数は、ダイバー全員がライセンスを持っていることもあり、山の事故や夏の海の事故に比べ遥かに少ない。それでも、事故が起こると、ベテランのダイブマスターまでが亡くなることがある。そのほとんどは初心者ダイバーの「巻き添え」である。「溺れるもの藁をもつかむ」で、パニックを起こした初心者ダイバーに抱きつかれ、絡みつかれ、もがかれ、レギュレータをもぎ取られ、などなどの「巻き添え」である。もちろん、初心者も一緒に亡くなっている。私も「ダイブマスター」の資格を取るために、必須条件の「レスキューダイバー」の資格を取得したが、この訓練では、初心者がどれほど怖いかを徹底的に叩き込まれた。

待ってください。「ダイビングなんかやりたくない」と決め付ける前に、ちょっと待って！ 大丈夫、大丈夫。ダイビングでは、自分で深く行こうと思わない限り、深く行くことはないのです。BCDというジャケットを着ているので、それに空気を出し入れすることにより、100mまで知らないうちに落ちていくことはないのです。「かなづち」とはダイビングの世界にはない言葉です。どうぞ、安心して『僕の村』へいらしてください。ただし、「深く行こう」と思えば、「いくらでも深く行けてしまう」のもダイビングです。また、深く行くのに全く「苦痛」はありません。「水圧」がかかって苦しいだろう、圧迫感を感じるだろう、と思うかも知れませんが、身体の中からも同じ圧力で押し返してくれるので、「耳抜き」さえできれば、身体が圧迫されたり、痛みを感じたり、苦痛を感じることは全くありません。エレベータに乗って数十階上がると耳がツーンとしますね。そこで「あくび」をしたり、鼻を摘んでかむと、スーと耳が通りますね。それが「耳抜き」です。この「耳抜き」さえできれば、人間、苦痛なしに100mでも200mでもいくらでも深く行けます。ただし、帰って来れなくなります。

【お葬式】

前回、『僕の村』でお葬式に、2回招待を受けた。前々回の韓国人事故の続きではない。1週間差で珍しく立て続けに村人が亡くなった。最初はDinoの、次にHermannの家の隣人である。『僕の村』の仲間は、私が俗な「エンターテイメント」を求めたり、美味しいグルメ・ツアーに参加したりする一般観光客ではないことをよく知っている。逆に、人間と触れ合いやその土地の文化・習慣に、私が非常に興味津々であることも皆がよく知っていて、そんな機会には、しょっちゅう声をかけてくれるのである。子供の洗礼式や、(鎮守祭りのような)村の小さなお祭りには、その家族と一緒に出かけるのである。(注意: 尤も、血なまぐさい「鬪鷄」に連れて行ってくれたのは閉口した。2羽のシャモが、足に「カミソリ」を縛りつけて「切り合う」のである。シャモ同士の生身の格闘ではない、人間がシャモに「武器」を持たせて「切り合い」をさせるのである。)

「Akio, 近所で今夜お葬式がある。フィリピンのお葬式、興味があるだろう？ 一緒に来ないか？」という。「それは、おもしろい、是非行ってみたい。でも、来て行く服がないよ。黒い服、貸してくれないか？」と聞くと、「何を言ってるんだよ。そのままでもいいんだよ。そのTシャツで充分だよ。」と来た。いくらなんでも、カトリックのお葬式だ。スイスのジュネーブでもカトリックのお葬式に参列したことがある。「他の列席者に失礼があってはいけない」と思い、一応、上は襟付きの半袖シャツを着て、下は長ズボンを履いて、夕方、出かけた。因みに、フィリピン、特にセブ島は、1521年世界一周を成し遂げた「マゼラン」が上陸した島だけあって、カトリック教が主流である。

(注意: マゼランは世界一周を成し遂げたと世界史では習うが、正確にはマゼランの部下が世界一周を果たしたの
である。マゼラン自身はセブ島の目の前の小さな島、マクタン島で、カトリック教への改宗に抵抗した島民たちに殺さ
れている。この時の酋長が「ラブラブ」で、侵略者を殺したフィリピンの「英雄」として崇められている。現に、ラブラブ
市、ラブラブ通り、海の中の大きな鯛の仲間(ホホスジタルミ)にも「ラブラブ」と名前が付いている。そうそう、ホテル・
スタッフの息子は学校の人気者で「ラブラブ」と呼ばれているそうだ。ハワイの「カメハメハ」のようなものであろう。)
カトリックの行事には、Hermann(『僕のショップ』の店長、ドイツ人)の子供 Bianca の Godfather(名付け親)として
洗礼式に臨んだ(第6回目の備忘録を参照してください。)ほか、いろいろなミサに招待されたことがある。
「もしや」と思って参加したお葬式であるが、「案の定」というか、やはり「期待を裏切らない」お葬式であった。
予想したとおり、あの厳格なヨーロッパ・カトリック教とは程遠いフィリピン・カトリックである。

厳格なカトリック信者には申し訳ないが、フィリピン流カトリックは好きだ。フィリピン固有の古い「文化」を失
わず、見事に融合した「フレキシブル・カトリック」とでも言おうか、「柔軟性」に富んだカトリックである。

まず、故人の家に着いてビックリした。100人以上の人々が家の周りに溢れかえっている。庭から、玄関
から、そしてさらには、玄関前の大通り(『僕の村』と町とを結ぶ2車線の幹線舗装道路)の片側を塞ぎ、テー
ブルと椅子、長椅子をいくつも出して、「博打」をしているのである。マージャン・テーブルが2台、ポーカーが5・6
テーブルあって、みんなでワイワイ・ガヤガヤやっているのである。ビールや地酒を飲み、(食べ物は大したもの
はないが)パンを手に「私設カジノ」である。目の前の幹線道路は当然片側通行になるが、誰も文句を言わず、
両車線とも譲り合いながら通行している。おまわりさんはおろか、交通整理の人もいない、みんな博打に惚け
ている。『僕の村』らしい光景だ。死者を前に、思いつき楽しく賑やかに過ごしている。なんと素晴らしい
『文化』ではないか。これぞ「固有文化との融合」だ。

このお葬式が毎日「夕方から翌朝まで」、しかもなんと「9日間」も続くのである。日本では近所の人は、お
通夜か告別式どちらかに参列するところ、ここの隣人は毎日参加するというから、参加する方も大変である。
(因みに、Halloween(ハロウィン:日本でいう「お彼岸」のこと。アメリカでは子供たちのお祭りになってしまった。)
の日でも、「夜」に家族連れでお墓にお参りをし、皆で揃ってご先祖様の前でパーティをする。もちろん屋間が暑いためだろうが・・・
「日本で Akio は「夜」、お墓参りをしないのか?」と真顔で聞かれたので、「夜にお墓に行くなんて! そんな怖いこと! 絶対し
ないよ。『可愛い Akio が来た』と言って、お父さんやお母さんに、お墓の中まで、まだ引っぱり込まれたくないよ。」と言ったら、皆
が爆笑したことがあった。)

「Akio, 遺体を見に行こう。」というので、「いいのか?」と思ったが、付いて家の中に入ると家族が並んで腰掛けて
いる。どう対処していいのかわからないが、ここは日本流に謹んで会釈をして、ガラス張りの窓から故人を拝
見し、胸の前で十字を切って頭を垂れた。部屋に入るとき、「異端児が入ってきたのでは?」と緊張した家
族の顔が、帰るときに和んだのがとても印象的だった。日本と同じ、「ありがとうございます。」という笑みだった。
庭に出て聞いた、「こんなに暑いところに9日間も遺体を安置して、ドライアイスを廻りに詰めてあるのか」と。
すると、何を言っているのかという顔をしたあと、「死んだ遺体だよ。血をすっかり抜いてホルマリンを注入してあ
るから問題ないよ」という。「なーるほど、毛沢東やレーニンと同じか。」遺体に対する思いの違いだな。

弔問客を見ていると、アルコール類は弔問客が持参するようだが、パンその他は家族が提供している。
「お金がないとお葬式も出せないね。」と言ったら、「そのとおり、お金がない人は、翌日埋めることもある。」との
返事だった。そういえば、3・4回目の訪問で、Bhiebs(Hermannの妻、例の“the second wife without
sex”)が友達のお姉さんが癌でなくなった時、そのお葬式を出すのに、友達に代わって寄付集めに奔走してい
たのを思い出した。僅かながら私も寄付をさせていただいたが、その友達はいま『僕の村』のお土産屋さんで
元気に働いている。もちろん、いつも挨拶を交わしている。

[ハイスクールの卒業式]

前回、Dino の息子 Kevin のハイスクールの卒業式に招かれた。この学校は、カトリック系の私立ハイスクールで、比較的裕福な家庭の子供が通っている。生徒のレベルは(この辺では)高く、所謂「いい学校」である。午前中、卒業生全員とその家族や親戚が、町の一番大きな教会でミサを受けた。牧師さんからこれからの人生の門出を祝うお言葉(と思う、セブ島語なのでよくわからない)をいただいたあと、全員で学校に移動する。そして、午後から所謂「卒業式」を行うのである。

広い校庭の前方に卒業生がステージに向かって座り、その周り3方を父兄・家族・親戚が「コ」の字型に取り囲んでいる。式開始前に会場を散策していると、このハイスクールの校長先生が遠くから、「Akio !!」と呼ぶ。「えっ!、俺のことを呼んでるの?」と、周りを振り返るが誰もその先生に答える素振りはない。見ると、この女性校長先生の目はしっかり私を捉え、まっすぐ私の方に近づいて来るではないか。この校長先生は、前々回のクリスマス・コンサートの時、イベント開始の前に「神への祈り」を捧げてくださったシスターである。もちろん、私はこの校長先生を覚えているが、まさか彼女の方が私の名前を覚えてくださっているとは思わない。あのコンサートからもう3ヶ月も過ぎているのである。校長先生がそばに来て、「Akio、よく来てくれました。あなたのフルネームを教えてください。」と言う。

理由を聞くのも失礼な気がして、「はい、Akio IHARA です。」と、スベリングも伝えた。彼女はメモを取った。

さて、いよいよ、卒業式だ。日本と同じ、国歌斉唱、開会宣言、来賓挨拶、などなどが続く。日本との違いは、周りの観客(家族や親戚)が持参の折り畳み椅子に座り、ビールを飲んだり、スナックを食べたりしている。「うん、うん、なかなか、フィリップンっぽくてよらしい」と、私も Dino からビールを受け取り、座って飲み始める。いよいよ校長先生の挨拶だ。よく分からない、というより全く分からない「挨拶」を聞き流していると、いきなり、「Mr. Akio IHARA.....」と、私の名前が耳に飛び込んできた。

「ええっ! うっそー! なに、なに? またステージに呼ばれるの?」

一瞬、頭の中は真っ白、身体は石のように固まり、口に含んだビールを吐き出しそうになった。

恐る恐る、こわごわ、顔を上げてステージを見る。シスター校長はチラリとこちらを見たものの、まだセブ島語で何かを話していらっしやる。どうやら、この1年、この町に貢献した人たちとその功績称えてくださっているようだ。「ああ、良かった。どうやら、ステージに引っ張り上げられることはなさそうだ。」と、分かってホット胸をなで、またビールを飲んだが、「ああ、怖かったあ」とため息が出てしまった。本当に「冷や汗」の一瞬だった。Dino が振り返り、親指を立てて、「Good」のサインを出していた。

挨拶のあと、いよいよ、卒業証書授与である。子供、一人一人が呼ばれ、(おもしろいことに)母親あるいは父親と一緒にステージに上がり、校長先生からそれぞれ卒業証書を受け取るのである。

Kevin は父親の Dino と一緒に、ポートマン Amadeo の自慢の娘 Johanna は母親の Flor と一緒に壇上に上がり、それぞれ卒業証書を受けた。近所の土産屋さんやガードマンの子供も卒業した。みんな嬉しそうにしている。家族の晴れ舞台の記念にと、私は知っている家族の親子写真を撮り続けた。

[Larry の婚約]

Larry 君、27歳、本当に親切で優しい若者である。何故か私を慕ってくれていて、私も彼が大好きだ。「嫌味」がなく、「裏」がなく、「計算高く」ない。腹を下して寝ていると毎日(ショップの)ティーパックを持って、私のコテージに見舞いに来てくれる。Hermann の奥さん Bhiebs も同じだ。私は部屋には鍵をかけないで開け

っ放しなので、「Akio, どうしてる? 元気になった?」と言って、時には子供も連れて彼女は入ってくる。私も皆に、「部屋に入っている女性は Bhiebs だけぞ。」と公言している。

話は飛ぶが、私の部屋(コテージ)は『僕のショップ』の隣のホテルにある。奥まった部屋で、目の前をスタッフがタオルやシーツを持ってよく通る。そんなスタッフを捕まえては世間話をし、「セブ語」を教わっている。スタッフの往来が煩わしいと倦厭する客もいるが、私はスタッフ全員が好きなので毎回この部屋に滞在して(住んで)いる。本来、冷蔵庫のない部屋だが、私が泊まる時だけ特別待遇で(無料で)設営してくれる。空調もあるが、使わない約束をして破格の値段(8ドル/泊)で住んでいる。実際、天井に大きなファンが廻っているので、寝るときも空調は必要ない。部屋掃除とバスタオル2枚は毎日交換してくれるし、シーツは2日おきに取り換えてくれる。ホテル関係者はこの部屋を「Akio's Suite Room」と呼ぶ。まさに、そのとおりだ。

話を Larry 君に戻そう。前々回、彼が結婚することになった。新妻は彼と同じネグロス島の出身である。ネグロス島はセブ島の西隣で、面積はセブ島の3倍ほどあり、セブ島よりもっともっと「自然」が残っている。セブ島は珊瑚礁が隆起した「炭酸カルシウム」の島で鍾乳洞がやたらと多いのに対し、ネグロス島は隣の島だが火山島で土も砂も「黒い」、それが「ネグロス」(黒い)の由来である。

ネグロス島ではカラバウ(水牛)を使って米作りが盛んで、マンゴー、パパイヤなどの果物の生産量が多い。

Larry は婚約し、翌年(2010年)の5月、ネグロス島の彼女の実家の教会で結婚式を挙げるという。

「Akio, 是非結婚式に出席してくれないか」と頼まれた。他には、Abe 夫妻と Hermann 夫妻とに出席をお願いしている、とのことだった。

「Larry, 招待、本当にありがとう。でも、5月はどうしても日本を離れないのだよ。」と言ったら、

「そっかー、では、結婚式の Godfather になってもらえないか?」と頼まれた。「OKなら、教会に正式に届けたい」と言う。私は既に、Hermann の子供 Bianca と Dino の子供 Micaella の Godfather になっている。その上 Larry の Godfather もか、とも思ったが、Larry のためならと承諾した。

彼は、結婚費用を稼ぐために毎日4本潜り始めた。これは大変な苦勞である。その上、18:00時から24:00まで、Abe が経営するバーでビリヤード系のアルバイトまで始めた。1週間もしたら、寝不足と披露で、目が真っ赤に充血している。

「Larry, なんでそんなに無理をしているんだ? 結婚式までに身体を壊してしまうぞ!」と注意した。

すると、彼の返事はこうだ。

嫁さんの実家、特に嫁さんのお義父さんが盛大な結婚披露宴を希望している。彼としては、「そんな一時的なパーティのために大金を使いたくない。今後の生活のために蓄えたい。」とお義父さんに願い出たが、聞き入れてもらえなかったらしい。お義父さんとしては、「自分の娘を嫁がせる結婚相手はきちんとした収入がある、まともな人間である。」ことを世間様に披露したいらしい。正に日本の田舎と同じ感覚だ。

「Larry, 君の考えは立派だよ。僕もそう思うよ。でも、田舎にも慣わしがあるからね。・・・どれくらい費用がかかるのかな。」と聞くと、彼は結婚披露宴に豚3頭、ヤギ2頭を買うつもりでいる。しかも、親豚は高いので、小さい子豚を買ってネグロスの彼女の家で飼育し、太らせてから「レッチョン・バプイ(豚の丸焼き)」に使うという。経費を切り詰めるため、子豚を飼って夫婦で育ててパーティを開こうとする。なんと健気な若者であることか。

「Larry, 子豚1匹、いったい、いくらするんだ?」ネグロス島ではセブ島より物価が安い、それでも、3頭ともなると結構な額だ。

「Larry, じゃあ、結婚祝いに子豚1頭をプレゼントしよう。」

彼は「それは多すぎる」と拒んだが、強引に押し切った。大きい子豚1頭2,500ペソ(5,000円)だ。

彼は、とっても喜んだ。その夜、ネグロスの彼女からも電話があり、お礼の言葉があった。彼女の写真は携帯で見せてもらっていたが、この時初めて声を聞き、話をした。

その後、千葉高の友達 MASA が6回目で、『僕の村』に来たので、この話をした。彼も感銘を受け、私に気を配って、小さめの子豚を1頭をプレゼントした。「MASA らしい気遣いありがとう。」

[結婚準備]

前回の滞在中、Larry は結婚準備で忙しかった。もちろん、ビリヤードの仕事はやめていたが、ダイビングは相変わらず1日4本を潜り、忙しい日々を送っていた。仕事の合間を縫っては、ネグロスに渡り、教会や市役所に出向いて、いろいろ手続きや結婚準備をしていた。ある日、

「Akio, ネグロスと一緒に行かないか？」と Larry から声がかかった。『彼女の実家』に一緒に行こうというのだ。「待てよ。Larry の実家でなくて、まだ結婚していない新婦の実家に行って泊まるのか？」

「そうだよ、我々の Godfather だし、いろいろ心配もしてもらったし、結婚式に出席できないから、今回は是非ネグロスに来てもらいたい。」と、誘ってくれるのだ。

「いいのかなあ。厚かましくないかなあ。」と思いつつも、非常に興味をそそられたのでお邪魔することにした。

Larry と朝早く出発、トライシクルで町に出て、バスで2時間南に下がって「港」まで、フェリーでネグロス島に渡り、そこからまたトライシクル2台を乗り継いだ。最初のトライシクルは海岸線を走るだけで、山の中には入らないと言う。Larry のフィアンセ、Marites が道路まで出て待っていてくれた。初めて会った。かわいい、かわいい、お人形さんのような女の子だ。Larry が惚れたのも無理はない。

彼女が自宅まで案内してくれた。ヤシに囲まれた林の中、広大な敷地の中に彼女の実家があった。周り是一片草原だ。その中にポツンとトタン葺きの大きな家が建っている。近くには綺麗な川が流れ、飲み水はその源泉から引いているという。

広い広い敷地一角に「豚小屋」が見えた。Larry と Marites が案内してくれた。

「居た、居た、居た――！！」豚が3頭。中くらいの豚が「Akio 豚」、小さいのが「MASA 豚」だという。

「おー、Larry, 3頭揃ったじゃあないか。おめでとう。」

彼は嬉しそうだった。ヤギは安いので、あとで買うそうだ。

そのうち、Marites のお父さんと弟が農作業からカラバウ(水牛)と一緒に帰ってきた。

日本からのお客さんということで、叔父さん、叔母さん、その他親戚が集まり、我々が途中で買った魚もお母さんが料理してテーブルにならんだ。さあ宴会だ。カラオケがバンバン鳴る。そのまま深夜まで続いた。

翌朝、4時半、隣で鶏のけたたましい鳴き声が出て目が覚めた。私が寝た「客間」は、中二階になっていてベニヤ板の隣が鶏小屋である。6時まで待って、まだ眠いけど起きることにした。お父さんはもう農作業に出かけていた。朝食後、Larry と Marites とに案内され、近所の親戚を廻り、搾りたての濃厚な牛乳を買い、帰りは川沿いを歩いた。「のどか」とはこんな生活を言うのであろう。

さて、今回の滞在では、Larry と Marites は結婚し、ショップの側の小さな家に住んでいる。彼の家に2度招待された。家財道具を始め何もない。食事はふんだんにあるヤシの木を燃やして鍋で煮る。水は大きなバケツで、水道を引いている家まで買いに行く。これから二人で協力して所帯を築ていくことになる。夕食に焼き魚と「貝」のスープとご飯をいただいた。「貝」は二人が浜辺で収穫したものだという。食後は5月の結婚式の写真を見せてくれた。すてきな結婚式だ。レッチョン・バブイがみごとに3頭も並んでいた。

[新兵器の導入]

今回、僕のコテッジに「新兵器」を3種持ち込んだ。電気コンロ、ステレオセット、ビーチ・チェアだ。どれもすべて大当たり。

「電気コンロ」で、いろいろ料理ができるようになった。地元の新鮮な魚を「直接」漁師から買って刺身や煮物料理を作ったり、うどん・卵を茹でて Larry 夫婦等を何度も昼食に招待できた。また、私の5人目の「弟・弟子」Huachyi(「ワチ」と読む)も2度招待した。Huachyiは31歳、シンガポール人で、英国の大学を出て弁護士をしている。今回、1ヶ月間の集中訓練を受けて、私と同じ「ダイブマスター」になった。Huachyi曰く、「セブ島に何度も来ているが、初めて美味しい日本料理を食べた」と。なかなか、兄弟子泣かせの言葉を吐く、かわいい奴だ。彼のダイブマスター取得祝いには、彼の希望で、6kgの Yellow Tail (キハダマグロ)をさばき、ワサビと一緒に刺身で出したら、凄い勢いで飛ぶように売れた。地元フィリピン人はもちろんドイツ人、スペイン人、スロベニア人までが、みんな美味い美味いと言って食べてくれた。(彼は帰国後、この正月に、初めて日本に遊びに来たので、私のセブ仲間と会い、また我が家に招待して田舎を案内した。)

「ステレオセット」のお陰で、いままでの音楽のない生活から脱却した。TVは全く欲しくないが、(イヤホンでなく)開放型の音楽が欲しかった。やっと、念願の音楽を手に入れ、Brothers Four、Andy Williams、ABBA、Carpentersなどをかけていると、案の定、いろいろの客が私の部屋までやって来る。シャンソンをかけるとフランス人が来て、「なんだ、Akioかあ。素晴らしいシャンソンが聞こえてきたので、誰かと思った。」と言って話込んでいく。ステレオのお陰で、人と接する別の「きっかけ」、というか思わぬ「副産物」が収穫できて嬉しくなる。

「ビーチ・チェア」はセブ・シティで2,000円で買ったものだ。昼食の後、ゆっくり本を読んでいると気持ちよく寝てしまう。そういえば、弟・弟子 Huachyiは自分のベランダにハンモックをつつて昼寝をしていた。『僕の村』には、ほとんど「蚊」がいない。東京の方がずっと多いと思う。ヤモリとコウモリのお陰だ。木陰でのビーチ・チェアやハンモックの昼寝はとっても気持ちがいい。

帰国する時に、新兵器は3種とも Larry の新婚の家に置かせてもらった。もちろん、「使ってちょうだい。壊してもいいからね。」と言って。

みなさんも、『僕の村』にいらっしゃいませんか？ お待ちしております。